

## 時代を駆ける：岡部健／1 在宅の死みとり14年

### ◇TAKESHI OKABE

最期まで自宅で過ごすことを望むがん患者らを訪問診療してきた岡部健さん(61)。97年に宮城県名取市に「爽秋(そうしゅう)会岡部医院」を開業し、在宅の死をみとり続けて14年。病院で亡くなる人が8割を占める現代で、死のあり方を模索してきた。東日本大震災で改めて命の重みをかみしめている。

《震災で地元は壊滅的な被害を受けた。患者の安否確認に追われた》

当日午後4時ごろ、仙台市にある医院の出先事務所に向かうと、スタッフがバタバタと患者に電話したり、近くの患者宅を訪ねていました。「患者も心配、自分の子も連絡がつかない」とパニック状態の看護師もいました。数日間は診療所を回ったり避難所にごん患者の痛み止め薬があるか確かめたり。訪問診療に必要なガソリンが入手できず苦労しました。あまりにいろいろな事があり、記憶が途切れています。

《患者約180人の無事を確認できたが、看護師の遊佐郁(ゆさかおる)さん(43)の行方が不明だった》

遊佐さんは地震直後、亘理(わたり)町荒浜の患者宅に向かったそうです。難病の女性が1人でおびえていた。津波警報が出て、帰宅した夫と女性を2階に移そうと、階段で押し上げていた時に水にのまれた。上から引き上げていた夫と女性は間一髪で助かりました。

面倒見がよく、患者を包み込む人でした。花見や芋煮会では接待係で、患者に喜んでもらうのがうれしそうでした。遺体で見つかり、花を手向けた時、私は「そこまで頑張らず、生きていてくれたら。でも頑張りたかったんだよね、ありがとう」と声を掛けました。

今回、人を助けるために命を落とした人が大勢います。人間は群れで生きてきたから、他者や集団を支えようと体が動くのかもしれない。職業意識を超えたものです。

《自身も昨春胃がん手術を受け、本格的に仕事を再開する矢先だった》

約2000人のみとりに携わりましたが、震災後は多くの不条理な死に直面し、吊いすらできない行方不明者の家族もいます。死をどう受け止めていくか、その基盤づくりが私の最後の仕事だと思っています。

=====

聞き手・下桐実雅子 写真・丸山博／火～土曜日掲載です

=====

### ■人物略歴

#### ◇おかべ・たけし

1950年3月14日、栃木県小山市生まれ。医療法人爽秋会理事長。がん患者の在宅緩和ケアのパイオニア。日本ホスピス緩和ケア協会理事

毎日新聞 2011年5月24日 東京朝刊



【時代を駆ける】インタビューに答える医師の岡部健さん＝仙台市青葉区で2011年2月18日、丸山博撮影